

平成 22 年度病害虫発生予察注意報 (第 1 号)

和歌山県農作物病害虫防除所

TEL 0736-64-2300

1. 病害虫名：イネ縞葉枯病
2. 対象作物：水稻
3. 発生地域：紀北地域
4. 発生予想量：多
5. 注意報発令の根拠
 - (1) 和歌山市 3 地点におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率はいずれも 10 %以上で前年に引き続き高かった。かつらぎ町における保毒虫率は 19.1 %と前年に比べて高かった（表 1）。これらの保毒虫率は、平成 3～12 年の平均（2.8～3.4 %、表 2）より高い。
 - (2) 平成 21 年 8 月の紀北地域の本田におけるイネ縞葉枯病発病株数は、25 株あたり 0.6 株（平年 0.04 株）と平年に比べて多かった。
 - (3) 休閑田における 4 月上中旬のヒメトビウンカ生息数は、紀の川市では 8.0 頭（平年 9.6 頭）、かつらぎ町では 4.8 頭（平年 6.5 頭）と、共に平年並である（表 3）。

表 1. ヒメトビウンカ(越冬世代)のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率^{a)}

平成22年 ^{b)}			平成21年 ^{c)}		
調査地点	検定虫数 (頭)	保毒虫率 (%)	調査地点	検定虫数 (頭)	保毒虫率 (%)
和歌山市 小倉	78	10.3	和歌山市 小倉	55	14.5
和歌山市 川永	51	15.7	和歌山市 川永	48	16.7
和歌山市 平尾・明王寺	105	20.0	和歌山市 明王寺	50	22.0
かつらぎ町 窪	115	19.1	かつらぎ町 窪	62	11.3

a)検定方法:高比重ラテックス凝集反応法

b)調査日:平成22年4月5～8日

c)調査日:平成21年4月13～17日

表 2. ヒメトビウンカ(越冬世代)のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移(平成3～12年)

(単位: %)

調査地点	平成 12年	平成 11年	平成 10年	平成 9年	平成 8年	平成 7年	平成 6年	平成 5年	平成 4年	平成 3年	平均
和歌山市小倉	0.6	2.0	2.3	4.7	0.0	3.0	—	7.2	—	—	2.8
かつらぎ町窪	—	2.4	2.0	2.3	—	6.6	3.4	2.0	3.0	5.1	3.4

注)ヒメトビウンカ採集および検定実施日は3月下旬～4月上旬。検定虫数が80頭以下の調査結果は除く。

検定方法:ラテックス凝集反応法

表3. 休閑田におけるヒメトビウンカの生息数(単位:頭)

調査時期		平成22年	平年
3月中下旬	和歌山市	0.0	2.8
	紀の川市	21.3	4.6
	かつらぎ町	0.7	1.4
4月上中旬	和歌山市	1.3	10.0
	紀の川市	8.0	9.6
	かつらぎ町	4.8	6.5

注)すくい取り調査(捕虫網20回振り)

6. 防除対策

- (1) イネ縞葉枯病はヒメトビウンカによって媒介される。越冬世代のヒメトビウンカは休閑田や圃場周辺の雑草に生息し、3月中旬頃から成虫になる。第1世代幼虫は4月下旬～5月上旬にふ化するので、この時期までに休閑田の耕起、圃場周辺の除草を行ってヒメトビウンカの生息密度を低下させる。
- (2) イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。
- (3) 窒素過多はイネ縞葉枯病の発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (4) 田植え時はヒメトビウンカに効果がある箱施薬剤を処理する。
- (5) 第1世代成虫は6月下旬頃に水田へ飛来し、第2世代幼虫の発生最盛期は7月上旬と考えられることから、前年にイネ縞葉枯病の発生が認められた地域では、この時期の幼虫を対象に追加防除を行う。
- (6) 本県の水稲奨励品種のうち、ハナエチゼン、イクヒカリ、キヌヒカリはイネ縞葉枯病に罹病しやすいので、とくに注意する。
- (7) 農薬については、最新の登録情報 (<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html> 農林水産消費安全技術センター HP 農薬登録情報検索システム) を参照し、適正に使用する。